

脇本海岸 渚だより

第16号(期間:2025年10~12月)

12月の寒い早朝に立つ海岸の蒸気霧

発行元;NPO法人脇本海岸ウミガメ・シロチドリ会
鹿児島県阿久根市

他の最新記事はFBページをご覧ください
<https://www.facebook.com/kamechidori>



当NPOの全体像や渚だよりのバックナンバー
などはホームページをご覧ください
<https://npokamechidori.com/>



鹿児島水族館の研修を脇本海岸で実施 (広報活動)

水族館で働く約50人が来海し「海岸の自然と保護活動の講座」のあと海岸を見学しました。後日送られてきた参加者のレポートによると「多くの学びがあり、海岸の美しさに驚嘆し、それを守る活動に共感した」「長島にはたまに行くが、途中にこんなに美しい海岸が有るとは知らなかった、もっと宣伝したら？」との声もありました。外部の目でみた海岸は地元が考える以上に高い評価であり、看板の設置や景観条例の制定などを、12月の市との海岸協議会で提案しました。



海岸防風林のカヅラ切り作業 (景観保護活動)



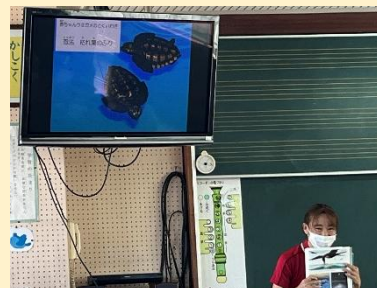
作業が終わり阿久根大島を背景に記念撮影

今回で3回目となる海岸防風林の清掃を3月に行うために、事前作業として繁茂した雑木の中に入っていくやすくするためのカヅラ切りを行いました。白砂青松の会やグランピングのスタッフにも参加していただき、海岸の南側の200m程の防風林を2時間かけて作業しました。あとは3月のゴミ回収の本番イベントを待つだけです。皆様のご参加をお待ちしています。

脇本小学校で水族館によるウミガメ講座開催

今年度も当NPOが海岸研修を含め4回の自然講座を脇小に提供しましたが、更に深く学びたいとの希望があり鹿児島水族館の専門講座がありました。

ウミガメ調査で当NPOがお世話になっている柏木学芸員から多くの映像と模擬の卵やウミガメを使いながらの楽しい専門講座でした。3年生全員がタブレットを使って学ぶ姿は隔世の感がありました。



映像を示しながら講義する柏木学芸員



講座後模型に乗って喜ぶ生徒たち

脇本小学校が農林水産大臣賞を受賞

令和7年度の「環境美化教育優良校等表彰」において、都道府県より推薦を受けた全国の小・中学校等の中から最優秀校4校が選ばれ、そのなかの1校に脇本小が入ったことの発表が12月にありました。独創的な環境美化教育に継続的かつ熱心に取り組み、地域社会と連携しながら地域の環境美化に大きく寄与している小・中学校を選出し表彰したものです。子どもの時から自然を愛し自然を守る活動を進めている学校の取組は素晴らしく、当NPOも引き続き支援していきます。

表彰に関する詳細な記事はWebで「第26回環境美化教育優良校」と検索してご覧ください。以下の資料は表彰記事の一部ですので、全体資料を確認をお願いします。

海岸清掃を続けシロチドリやウミガメが産卵する豊かな砂浜取り戻す

農林水産大臣賞 鹿児島県 阿久根市立脇本小学校

遠浅の白い砂浜が約3kmにわたって続く脇本海水浴場。夏場は県内外から多くの観光客が訪れ、東シナ海に沈む夕陽スポットとしても知られている。その景観を守るために海岸清掃活動に取り組むのが同校の児童たちだ。砂浜にはペットボトルや空き缶などの漂着ゴミが広範囲に散乱しており、長年にわたりゴミ回収に励んでいる。

きめの細かい砂浜には多様な動植物が生息している。中でも、アカウミガメやシロチドリが毎年、産卵に訪れる浜辺としても有名で、児童はNPO法人脇本海岸ウミガメ・シロチドリ会の協力を得て、体験学習に取り組む。絶滅危惧種であるシロチドリは、全国的に急速に数が減少しており、脇本海水浴場でも、ヒナの巣立ちを確認できない年が増加。要因は複数考えられるが、砂浜の減少やヘビ、タヌキなどによる捕食などさまざまだ。砂に直接卵を産む習性があるシロチドリは、砂浜に草が伸びていたり、ゴミが散乱していたりすると、産卵できない。無事に産卵したとしても、保護色の卵は人が気づかず踏んでしまうこともある。そうした現状を学んだ児童は、注意を促すポスターや看板を作り、住民と海岸に設置している。



モクマオウ(木麻黄)とは

忍び寄る脅威

脇本海岸の防風林に外来植物であるモクマオウが勢力を拡大していて、モクマオウ一色の林に変わりつつあります。さらに砂浜にも進出し始めているため、ウミガメが巣穴を掘りにくくなっています。対処としては、まずは産卵場所の確保のために砂浜のモクマオウを当NPO主導で除去し始めているますが、大元の防風林のモクマオウ伐採は行政の主導が必要であり、海岸協議会などで対策の議論を始めています。

モクマオウの分布

折口海岸(脇本海岸の南半分)に密集しており、防風網を通り越して砂浜にも幹径10cm以上の中木が迫り出しています。海岸の北に行くほど防風林の密度は低くなり砂浜への進出は少ないものの、幹の直径が30cmを超える大木が散在しており、多くの種子を拡散しているため今後拡大していく可能性が高いです。

特徴: 松との比較

モクマオウの幹



樹形はよく似ている



松の幹



モクマオウの葉は松の2倍以上の長さで実は小さい



モクマオウの実はいくつも小さいが、中には小さな羽のついた種子が無数入っている

<いつから?なぜ?>

モクマオウは防風防砂のために1970年前後に脇本海岸の防風林に導入されたものです。昭和40年代(1960年代)に松くい虫により防風林の松が全滅した後、当時、防風林に適した樹木ということで全国的に導入されたものが脇本海岸にも植樹されたようです。

<繁殖する理由は?>

根が走りやすく伸びた先で芽を出すことに加え、有翼の種子を多数放出するため広く拡散します。成長が早く落ちた多量の葉は地表を覆いつくすため、他の樹木の発芽や成長を抑えます。塩分のある砂地を好むため、海辺の砂地でも芽を出します。そのためウミガメやシロチドリの産卵場所である堤防前の砂浜にまで進出してきています。

<今後はどう対処する?>

このまま放置すると防風林は在来種(松、トベラ、マサキ、シャリンバイなど)が駆逐されモクマオウだけの殺伐とした風景になるだけではなく、絶滅危惧種の産卵場所を奪ってしまいます。ウミガメ産卵場所に発芽した小さなモクマオウの除去はNPOのボランティア活動として地道に行いますが、拡大の勢いはすさまじく除去にはかなりの労力を要します。

世界自然遺産の小笠原諸島ではモクマオウの危険性に気づき2020年頃から東京都が駆除を始めています。鹿児島でも奄美大島で令和5、6年に行政と現地のNPOで駆除しています。前例に学び、これ以上拡大しないうちに外来植物として駆除すべく県と市に支援を働きかけていきます。